

病院の話

昨今、病院の話が明るみにでるたびに騒ぎになる。いくつか、ひどい病院（たとえば、もう消滅したが安田病院など）の内幕が暴露されて、そのたびにマスコミが扇動して大騒ぎする。当たっていることもあるし、ずれていることもある。

長崎に「医学伝習所」が設立された幕末、一家に病人がでればどうしたか。

狭い家の、陽当りの悪い一室に「息をひきとる」まで、生活させるのである。もし医師にみせれば、その医療費のために一家全員が餓死せざるを得ないだろう。（司馬遼太郎氏、胡蝶の夢） 敗戦後もしばらくおなじような状況が続いた。日本中が貧しかったし、抗生物質は発見されていたが世界中で品不足であったからやむを得ないが、大学病院でさえ、抗生物質を投与するのに現金とひきかえでなければならなかった。今、抗生物質の濫用によって、MRSA や VRE,あるいは、多剤耐性の結核菌が出現してきたのは、その反動みたいなものかも知れない。

先に述べた幕末のことを思えば、医療をうけられるだけ、よしとしないといけないのかも知れない。

病院ではないが、ある特養ホームに収容されたおばあさんの話。2ヶ月前に診察に来たときと比べると、えらいやせている。どうしたん？ときいたら、「2週間、顎がはずれてましてん。」へっ？ いや、その間食餌はとっていないのか。はあ。職員も職員である。三度三度の食事のたびに全部残している理由を尋ねることもしなかったのか。2週間も。

このことから、介護をするのは、家族がもっともいいという結論に達する。家族なら食べない理由をきくだろうし、食欲がなければ何か食べやすいものを買ってくるだろう。

家族はしんどいけれど在宅介護が広がっていく理由がこれである。

ちょっと話題を変えて、小生の好きな話を。

病院が移転して、空きビルが残っている。小生の娘、「地縛霊なんかでえへん？」

天六辺りの病院に入院していたら、と、教えてくれた。壁に向かって、「そこに誰がいる」と患者が騒ぐ。それをきいた看護婦が、詳細を確かめもせず詰所に行って塩をもってきて、そこに向かって投げつけて、何事もなかったかのように戻って行った。（口には出さないが、怨霊退散！！とか思っていたのだろうか？）

個室では、「この部屋、絶対いや！」と言う人がいて、何も感じない人だけが入室できる。

トイレ入口のドアに板で、封をしている。「どうして使わないんですか？」（彼女の期待としては、**neck hanging**があったから、の答えがほしかったらしいが）故障してて、直す予算がないからや。

病院は現代科学の粋を集めて建設される、というのが本当か？

エレベーターの故障なんかしょっちゅうや。大体、建設する前に、院長を初めとしてみんな集めて地鎮祭を執り行う。清めの清酒を四隅に奉納して流している・・・すると、彼らは、地縛霊がいることを信じているのだろうか？